

教育実習の思い出（その2）

校長 武井 正明

大学最後の教育実習は4年の秋。新潟市の小学校。

一番年上ということで「教生長」を仰せつかった私は、事前の打ち合わせに、道を間違えて、かなり遅刻してしまった。

「遅れてすみません!!」ひたすら頭を下げる私に、校長先生が、

「そういう時は事前にちゃんと調べて来るっちゃ」ん? 「来るっちゃ?」ふとおかしくなって吹き出してしまった。これが校長の逆鱗に触れる。校長先生は佐渡の方（「ちゃ」は佐渡の方言）だった。そこから私は、校長先生から厳しくマークされることになる。

実習用にバイトで買った新しいスーツをじ〜っと見て「今の学生は良いスーツ着てるなあ、おい」なんて嫌味っぽく肩を叩かれ「ハイ…」と引きつった笑顔で返す。常に背中に視線を感じながら、なんとも気疲れする日々だった。

そんな中、私の担当をしてくださった唐沢哲也先生は中堅男性教師。学校の大黒柱。でもそれを前面に出さず、子どもたちをよ〜く俯瞰して、絶妙のタイミングで指導の手をさり気なく入れる。あくまで乗り越えるのは子ども自身、教師はその手助け、といった先生のスタンスが伝わってきた。

唐沢先生は、私のことを本当に可愛がってくださった。ある時は、私の実習日誌を同僚の先生方に紹介して「武井君の書き出しは、実に面白いんだよねえ」と褒めてくれた。これがどれほど大きな自信になったか知れない。

私の未熟な授業も、ほんの少しでも良いところがあれば、それを殊更大袈裟に褒めてくれる。だから放課後の反省会が楽しみでしかなかった。唐沢先生に褒めてもらいたくて必死に頑張った。

唐沢先生の学級は温かい雰囲気、いつも笑い声で溢れていた。当時のその学校は、教員も児童もみんな裸足。一日終わると足の裏は真っ黒。外で芋掘りをやって、それを蒸して給食時に食べた（腹パンパン）。この実習も最後は号泣して子どもたちと別れた。

その後、秋の収穫祭や餅つき大会にも度々呼んでもらった。

そして教員採用が決まると唐沢先生にいち早く電話した。三条第三中になりましたと伝えると「良かったなあ」と喜んでくださった。奥様の実家が三条第二中のすぐ傍だった縁で、下宿先まで紹介してくださった。その大家さんご夫妻は、私の恩人となった。

唐沢先生とは年賀状で挨拶をしていたが、いつからか途絶えてしまった。あの時の礼もしっかり伝えず今日まで来てしまった。本当に恩知らずな自分である。